広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ジューディス』の本文批評のために（続）
Author(s)	酒見，紀成
Citation	ニダバ，14：26 - 33
Issue Date	1985-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047163
Right	
Relation	

論　　文

『ジューディス』の本文批評のために(続)

酒見紀成

〔『ニダバ』第13号よりつづく〕

251. **h[i]ld[e].** MS. hyldo. *hyldo* は普通 "favour, grace" を意味するが，それが文脈に合わないので Leo がこのように修正し，以来 Grein, Rieger, Sweet, Körner, Cook, Wyatt 等の多くの学者がこの読みを採用している。Malone は MS. の *hyldo* を強勢のない音節における "late phonetic confusion" の結果，つまり *hilde* > *hyldo* と考える。一方，Dobbie は，*hyldo* には "loyalty, allegiance" の意味もあるので，写字生が *hyldo gebeodan* を "to announce their loyalty, to pay their allegiance" の意味に解したとしてもおかしくないと言う。問題は，詩人もそのように考えていたのかどうかである。

252. **on...sæte.** Wyatt は，これは *onsæte* の tmesis だと言う。

263. **hæ[s]te.** MS. hæfte. *hæft* は通常 "a captive, servant"，"bond, fetter; captivity"，および "haft, handle" を意味するが，ここではどれもしっくりしない。また *hæfte* という副詞も存在しない。(1) Grein は *hæste* ("fiercely, violently") と修正することを提案し，Sweet や Cook はこれを採用する。(2) Kern は古代アイスランド語の *heipt* ("feud, battle") と対応する古英語 *hæft* を仮定し，その dat. sg. と解する (Dobbie も (?))。(3) Bos.-Tol. は *hæft* ("haft") の dat. sg. ととり，"with the haft [= sword, a part put for the whole, cf. ord, ecg ?]" と説明している。写本の形を保持する Thorpe, Ettmüller, Rieger, Körner, Kluge (3ed.), Wyatt たちもこのように考えるのだろうか。Cook は詩にはこの名詞の instr. sg. の例がないと言うが…。

265. **dægweorce.** MS. dæge weorce. *dæge-* は "a combining form" ではないので，Cook はこのように修正する。Dobbie も *dægweorce* の方が "more regular" であろうと言うが，他の版本は *dæge-weorce* とくっつけるだけである。

268. **gebylde.** この p.p. の意味 ("emboldened") は次行の *sweorcendferhðe* (「ふさぎ込んだ」) と矛盾するように思われるので，Cook は *gebylde* を "mightily roused" (「ひどく心を乱された(?)」) と訳した。一方，Cosijn はこの語を *geblyde* (= *geblygde*) "dismayed" に修正することを提案し，Sweet (15ed.) はこれを "tempting" であると言う。

270. **cohhet[t]an.** MS. cohhetan. この動詞は他に記録がないので意味が定かでない。Mod. E. *cough* と関係がありそうであるが，その古英語は **cohhian* と考えられるので，その派生形であれば

cohhettan の方が "more regular" であろう。 Cook と Kluge (3ed.) はそのように修正する。そして Bos.-Tol. は *cohhetan* に "to bluster" の意味を与えているが, Sweet は "cough (?)[1] とし, Cook も "lament (?) , wail (?) " とする。

271. **Gode orfeorme.** Thorpe は初めこのように読んだが, 第 2 版では *gode* を *gōde* と直している。その場合には「美徳を失って」(羽染氏) とか, "having no success" (Bradley) の意味になる。Bos.-Tol. や Ettmüller も同じ解釈である。一方, Sweet, Cook, Wyatt, Gordon 等は "without God to believe in" と解する。

272. **þā wæs hyra tīres æt ende.** Cook はこの構文を, (a) *þā wæs hyra tir æt ende*; と (b) *þā wæs hyra tīres ende*; の "confusion" の結果であると言うが, Körner, Sweet (15ed.) , Wyatt たちと共に非人称構文と解してよかろう。

273b-274b. **Hogedon þā eorlas/ āwecc[an] [hi]ra win[e]dryhten: him wiht ne spēow.** Rieger, Sweet (古い版) および Wyatt は頭韻を規則正しくするため *þā eorlas hogedon* というふうに入れ替えているが, Cook は Foster と共にそれを "a form seldom, if ever, found" と言う。また, Holthausen は入れ替えないで, *eorlas* の後に *sōna* を補う。しかし, Kaluza, Trautmann および Pope は *āweccan* を l.273b の終わりに置いた。Dobbie は, その方が l.274 自体も良くなり, これが妥当な解決策であると言い, Sweet (15ed.) もそのように修正している。

275. **arod.** 詩では他に記録がない (Dobbie)。

276. **[þæt] .** MS. にはないが, l.275 の *tō ðām* ("so") を承けてどの版本も *þæt* を補っている。

279. Ettmüller と Grein は頭韻を規則正しくするために a-verse と b-verse を入れ替えるが, b-verse の double alliteration の例は l.149 にも見出される。

280. **līfes belidenn[e].** *beliden* は他の箇所では dat. sg. と共に使われているが, ここで gen. をとったのは, *belēosan* ("be deprived of"), *benæman* ("deprive") , *benēotan* ("deprive") 等の動詞が, 通例 dat. と共に用いられるが, 時折 gen. をもとることがあるからであろう (Dobbie)。

285. **forwyrd.** Cook の Glossary に acc. とあるのは nom. のミス。

286b-288a. **þæt þære tīde ys/ [nū] mid nīðum nēah geðrungen,/ þe [wē līfe] sculon losian somod,/ æt sæcce forweorðan:** Grein, Körner, Sweet (15ed.) , Cook, Wyatt たちはこのように読んでいるが, これは先に Ettmüller が *þæt þære tīde [þā gīt]/is mid nīðum.../þe [wē līfe] sculon losian somod,/...* と読んだものを一部修正したのである。問題は l.287a が one foot になるのを避けることである。Foster はここで *nū* が主強勢を置かれ, 頭韻を踏むことに反対し *mid nidgedal* と読み, Rieger は *mid niða bearnum* と読み, Heath という学者は *mid niþe niwum* と読んだ。これらの読みと全く違った読みをするのが Kluge で, 彼は 2 行半を 1 行半に縮め, *mid nīðum nēah geðrungen, þe [wē] sculon [nū] losian,/somod æt sæcce forweorðan* と配置した。Dobbie は Klaeber の提案に従って, *nū* を *nȳde* ("by necessity") に変えて, この配列を採用している。また彼は *nīð* = "man" とする Grein と

Klaeber の解釈を紹介しているが，Cook はこれに否定的である。（Cook は先の Rieger の修正は "weak" であり，Heath のそれも韻律的には問題ないが，*nīð* がそのような形容詞と共に使用されることはないようだと言う。）

298. **lind[wiggendra].** MS. は Cook によれば *linde:* であり，Sievers によれば *lindeg-* である。初期の校訂者たちは Thwaites に従って *lind* と読んだが，これは「楯をのがれる」となり意味をなさず，またこの半行 *lāðra lind* は短かすぎる。そこで Ettmüller は *lindwigendra* に，Grein と Cook は *lindwiggendra* に修正した。しかしそれはここでは必要のない拡充韻を生じることになる。また，Wülker と Kluge（3,4ed.）は *linde* と読んでいるが，それはここで期待される "shield-bearer" の意味ではなく，単に "shield" の意味しか持たない。かくして Dobbie は *lindwerod*（"a band armed with shields"）と直し，Sweet（15ed.）は Malone に従って *lindwīg*（"forces"）と修正する。

307. **þegnas on ðā tīd.** Luick はこれを E-type ととり，*tīd* を *tīde* に修正することを提案しているが，Dobbie は定冠詞も強勢と頭韻をとり得るので，A-type ととっている。（*þegnas* は Cook の Glossary に nom. としてあるが，*gelyste* が非人称動詞の単数形であるので，acc. のミスであろう。）

313. **Wælscel.** この複合語は他に記録がないので意味が定かでない。問題は第二要素の *-scel* で，これを Wright-Wülker はラテン語の *concisium* の注解として当てられた *scelle* と関係づけ，さらに古代アイスランド語 *skellr*（"smiting, beating"）と関係づけ，Holthausen, Bos.-Tol., Sweet 等もこれを受け入れている。しかし *scolu*（"band, troop"）には *sceal* の別形もあるので，これとの関係も無視できない。一方，Cosijn は *wælscel* を *wælstōw*（"battle-field"）の同意語であると彼が考える *wælstel*（= *-steall*）に修正する。また Brinz は *wæl feol* に直そうとしたが，これは推賞できないと Dobbie は言う。その Dobbie は *wælscel* と *rēocende hræw* が *on innan* の目的語であるなら，これらは与格でなければならないとして，MS. のこの部分には "a more extensive corruption" が下に横たわっている可能性があると言う。しかし，*wælscel* と *hræw* はいずれも対格としてよかろう。

317. **brād swyrd.** 多くの版本で 2 語として扱われているが，Dobbie は *broadsword* という形態が後に現われているので，これらは複合語であろうと言う。しかしこれは理由が薄弱である。

323. **[cwicera]** Cook は MS. のこの部分の 7 文字は判読できないとしているが，Sievers は *-wicera* と読めると報告している。

326. **wlanc wundenlocc.** この 2 つの形容詞はいずれも sg. で，*cnēoris*（sg.）（"tribe"）にかかるが，定動詞が pl.（*[wæ]gon and læddon*）であるのは，意味に一致したものであろう。しかし Ettmüller と Grein は *wlance wundenloce* と修正する。また，*wundenlocc*（"curly-haired"）に抵抗を感じた Rieger は，これは写字生が MS. の *mægða* を *mǣgð*（"tribe, nation"）ではなく，*mǣgð*（"maiden"）の gen.pl. と解したために，Judith を想起し，うっかり *wundenlocc* と書いてしまったのであって，本来は *wigena heap* であったのではないかと言う。しかし，直前に *cnēoris* があるので，このような誤解をすることはないであろう。

330. **mǣrra mādma.** この属格を支配する名詞として Timmer は *mādma* の後に *mā* を補い，Rieger は *fela* か *worn* を補うことを提案したが，l.158 の *þāra ðǣðða* も独立的に用いられている。

333. **[on]** MS. 7 この記号は *and* の代わりに用いられるのが常であるので，Thorpe と Kluge (3ed.) は *and* と読み，Grein は前置詞の *and* と読んだ。そして Ettmüller は *æt* と修正した。しかし Rieger が *on* と修正してからは大体これが採用されている。

344ff. *in swegles* からこの詩の終りまでの 6 行が写本では欠けているが，folio209b の下の余白に17世紀か18世紀の書体で残りの部分が写してある。Cook はこれに依り，Dobbie は "the Junius transcript" から補ったと言うが，結果的には両方ともほとんど同じである。

346. **[ā]** MS. にはないが，Sweet がこれを補って以来，これに従う学者が多い (Körner, Foster 等)。Grein と Rieger は *up* を補う。しかし，Dobbie は，前の行も後の行も拡充韻を持っているので，*ā* を補うことは "tempting" ではあるが意味的には必要ないとして補わない。

348. **þe.** Ettmüller はこれを *he* に変え，l.348a の後に an exclamation point を置く。

350. **and swe[gles] drēamas [purh his sylfes miltse].** Holthausen と Trautmann は *miltse* を *miht* に変え，さらに Trautmann は l.350a を *and swegldreamas* に修正しようとするが，これは彼らが l.350 を前の数行と異なり通常の韻律と考えるからである。しかし，これを拡充韻ととる Pope は l.350a を *sæs ond swegles dreamas* と修正することを提案している (Dobbie)。

※

近年再び *Beowulf* の成立年代が問題になっていることはこの小論の冒頭で述べた。それを端的に表しているのは1981年にトロント大学出版局から出版された *The Dating of "Beowulf"* である。この問題を論じる際に明確にしておかなければならないことは，作品の成立年代と写本の作成年代の区別である。写本の作成年代については10世紀末から11世紀初頭ということで大体一致している。しかしこの詩がいつ現在のような形になったのかということについては，この詩に後期ウェスト・サクソン方言の他にノーサンブリア方言，マーシア方言，およびケント方言の語形が混入していること，従って数度の転写を経ているらしいこと，最終的な編集者である詩人は多分キリスト教徒であろうが，詩の題材が全く北欧的であること，670年頃サトン・フーに埋められたと推定される船とその中から発見された宝石や武器が *Beowulf* にあるシュルドの船の葬儀を想起させること等から，8 世紀頃の作と考えられてきた。筆者も *Judith* に見られるような定冠詞の発達が *Beowulf* には認められず，散発的にしか出て来ないので，写本の作成時より少なくとも 2 世紀くらいは古いと思っていた。今もそう思っている。ところが最近，Kevin S. Kiernan という学者が "The Eleventh-Century Origin of *Beowulf* and the *Beowulf* Manuscript" (*The Dating of "Beowulf"*, pp.9 - 22) を発表し，この詩は写本作成時に編集されたもので，前半と後半，すなわち若いベーオウルフのデンマークでの英雄的行為と老年になってイェーアトランドで竜と対決する場面は本来別々の写本に書かれた独立した話であり，二人の写字生が，特に写字生 B がこの二つの詩を結合するために初めてベーオウルフ

の帰国の話を現存する写本に書き入れたもので，これは未完成の草稿であると主張した。これは従来信じられてきた *Beowulf* の構造の統一を脅かしかねない "revolutionary thesis" であるが，この叙事詩の成立年代を写本制作時に近付けようとする「革新派の人々」(藤原博氏による書評のことば) も存在するので Kiernan の説も無視できない。彼の説の主な根拠は写本に関するいくつかの事実であるが，同様に写本研究に従事する学者が Kiernan と同じ結論に達するとは限らないので (例えば L.E.Boyle は二人の写字生は転写しただけと考える)，その根拠は写本に関する事実の解釈にあると言わなければならない。そこで以下で *Beowulf* と *Judith* の他に三つの散文作品を含む Nowell Codex の興味ある事実を取り上げたい。

(i) Nowell Codex は二巻の写本から成る MS British Museum Cotton Vitellius A XV と呼ばれる写本集の二番目のもので，丁付けで言えば folio94^{a} から folio209^{b} までであり，その中の四番目に収まっている *Beowulf* は fols.132^{a} - 201^{b} を占める。そして写字生 A は fol.94^{a} から fol.175^{b} の第三行までを，写字生 B は同じページの第四行から *Judith* の終わりまで，つまり fol.209^{b} までを記写したと考えられてきた。しかし Kiernan は *Beowulf* は元来一冊の別個の本として筆写され，後でその写本の散文の部分に付け加えられたものであろうという。また *Judith* も16世紀か17世紀頃この写本に追加されたと考えているようである。理由は，*Beowulf* は八つの折丁 (quire) のうち最後の二つを除いて，四枚一組の羊皮紙から成るが，その前の散文のテクストは五つの折丁のうち二番目から五番目までが三枚一組になっている (三番目と四番目のものには half-sheet が足してある) とみるからである。一方 Boyle は五つともこの写本の基本的な format である四枚一組と考える。この写本の周囲が焦げているので，いずれの見方も可能なのである。ただ Kiernan は，*Beowulf* の第一ページの下の余白に *Vi[tellius]A15* というすり切れた署名が見えること，このページが表紙の役目をしたために生じたと思われる損傷が下の 3 分 1 にあること，*Beowulf* だけが両写字生によって繰り返し校正されているが，散文の部分にはそれが見られないこと等を挙げている。

(ii) *Beowulf* の八つの折丁 (BQ1 ～ BQ8) のうち BQ7 と BQ8 だけが五枚一組，従って 10folios から成り，他はすべて四枚一組の 8folios 。行数についてみると，BQ7 と BQ8 は21行で，他は20行を基本とするが，BQ5 (fols.166 - 173) が例外的に22行。そして BQ6 の中の 4 ページ (fols.177^{b} - 179^{a}) が21行。そこで Kiernan は BQ7 と BQ8 に書かれている竜退治の話は本来別の詩であると言う。

(iii) BQ7 の最初のページ (fol.182^{a}) の損傷がひどい。Kiernan は fol.182^{a} を再生羊皮紙と考える。つまり写字生 B が二つの詩をうまく結合するためにこの部分を消して書き直したからだと。また BQ6 にあるベーオウルフの帰国の話もそのために考え出されたものだと。このページには写字生 B の書体の発展が認められ，他の箇所の角張った *a* が新しい丸っこい *a* に変っているが，これは彼がこの詩を長い間保持していて改訂を続けていたことを示すものだとも言う。

(iv) 写字生 A が BQ6 の fol.175^{b} の四行目から突然写字生 B と交替している (Boyle はこの行の最

初の *moste* からではなく語末の *e* から交替していると言う)。写字生 A は BQ6 の最後まで筆写するつもりであったと思われるが，元来別々の二つの詩を結びつけようという相談が持ち上ったため，途中で交替し，写字生 A はすぐ前の BQ5 へ戻り，話の筋を通すために "revise" したであろう。BQ5 (fols.166 - 173) だけが22行になっているのはそのためであると Kiernan は考える。一方 Boyle はこの突然の交替は写字生 A の病死によるものであろうと言う。

(v) 節を示す数字 (fitt number) についてみると，序の部分に番号がないこと，写字生 A が XXIIII の代わりに XXV と書いていたために，後の第三者が XXV を XXIIII に変え，また XXVI，XXVII，XXVIII，XXVIIII のそれぞれ最後の I を消して XXV，XXVI，XXVII，XXVIII に変えていること，写字生 B が fol.177^{b} においてスペース不足のため XXX と書く代わりに *Oððæt* の *O* をマージンに大書していること (結果的に XXVIIII を書き忘れたような誤った印象を与える)，fol.194^{a} の12行目の終わりに XXXVIIII と書こうとしたが長すぎて入りきらず，結局書かなかったこと等が挙げられるが，最も重要なことは XXIIII の欠落である。これが例の22行の罫線をもつ BQ5 で生じているので，Kiernan は元の詩にあった第二十四節はそっくり削除されたと考えるが，Boyle は，写字生 A はうっかりか故意に序に番号を付けなかったが，XXIII まで来て，このまま進めば自分の最後の節は XXX になり，一方別個に作業していた写字生 B の最初の節が XXXII になるということに気付き，XXIIII の代わりに XXV と書いたのであって，もし病気にならなければ I - XXIII を II - XXIV に訂正していたことであろうと言う。Boyle は元の稿本にも節の番号は書いてあったと言うが，Kiernan は書かれていなかったと考える。

(vi) fol.183^{b} の上の三行が不明瞭であることについて，Kiernan は，これは故意に消されたもので revision が進行中であったことを示すもの (すぐ前の fol.182 は例の再生羊皮紙) と言い，Boyle は，この折丁 (BQ7) と次の BQ8 は上部に水がしみ込んでいると言う。

このように二人の学者の解釈は真向から対立するのであるが，一致する点もある。それは写字生 A が BQ6 の最後 (fol.181^{b}) まで筆写する予定であったと考える点，写字生 B は BQ6 の途中で A と交替した時，すでに BQ7 と BQ8 を筆写し終えていたと考える点等である。そのように考えなければ，BQ6 の途中で交替した写字生 B が fols.177^{b} - 179^{a} において，A が引いた罫線を無視して一行ずつ余分につめ込んだ事実が説明できない。

Beowulf は現存する Nowell Codex において作られたとする Kiernan の説は非常に魅力的であるが，多少無理というか飛躍があることは否めない。例えば，もとの作品にあった第二十四節が丸ごと削除されたという主張，BQ6 は "transitional gathering" であり，ここで初めてベーオウルフの帰国の話が導入されたという主張などにそれが感じられる。一方 Boyle の解釈はそう面白くはないが，足が地についている。彼の推理はこうである。

二人の写字生はほぼ同時に開始した。B はまず *Judith* を筆写した。*Judith* の折丁がこの写本の基本的な format (8folios・20行) になっているのはそのためである。三つの短い散文から写し始めた

Aの筆は遅かった。仕方なくBは自分が引き受けた*Beowulf*の終わりの7分の2に移った。ところがその分量は840行であった。8folios・20行の折丁は使えない。これを使うと2と8分の5になり，*Judith*との間に大きな空白が生じる。そこで10foliosの折丁に21行の罫線を引けば，10×2×21行＝420行となるから，これを二つ使えば，ちょうど840行が入る。一方AはBQ4を写し終えた時点ですでに36行分だけ余分に羊皮紙を使っていた。それ故BQ5では2行ずつ余計に入れた。これで32行（16ページ×2行）取り戻すことができた。自分の仕事を終えていたBはBQ6の途中で病気になったAと交替し，fols.177^b - 179^aの4ページに1行ずつ余分に書いて，4行の遅れを解消した。Bは先に写し終えた*Judith*を写字室の係官に手渡し，BQ7とBQ8にとりかかったのであった。そして筆写されたBQ7と8も，Aが終了するのを待つべくどこかに保管されていたが，そこは窓のそばのすすけた棚であったらしい。BQ7の最初のfol.182^aとBQ8の最後のfol.201^bが汚れているのはそのためであり，BQ8の上部に水がしみ込んだのもその時である。

Kiernanの11世紀成立説の根拠はもう一つある。*Beowulf*の冒頭で詩人はDanish Scyldingの家系を恥ずかしがることなく賛美しているが，そういうことが可能になるのはCnutが王になった1016年以後のことだと言うのである。しかし故厨川文夫博士はこの解釈は的はずれであると明言しておられる。「スキュルドのことを語った部分のほとんど半ばの行数はスキュルドの葬儀の船に積まれた宝の描写である。作者の眼目は，スキュルドの不思議な幼年時代でもなく，王としての華々しい戦勝でもない，スキュルドの葬儀が豪華壮麗をきわめていながら，無益なものである，という点なのである。」と。

※

ここまで書いてきて，「英文学研究」第61巻第一号が送られてきた。折よく，この中にKiernanの著書Beowulf *and the* Beowulf *Manuscript*（Rutgers University Press, 1981）の佐藤修二氏による書評を見出した。氏も「…Kiernanの結論にはただちに賛成はできないにしても，この唯一の写本の重要性を説く彼の主張は大いに傾聴に値する。」として，賛成はしていない。また*The Dating of Beowulf*に言及して，「歴史的背景という点だけからすれば，Kiernanの主張する1016年以後の他に，9世紀も10世紀も可能性があると言わなければならない。」とも言う。客観的証拠が少ないだけに，成立年代の問題は迷宮入りになる公算が大きい。

BIBLIOGRAPHY

Texts

Cook, A.S.(ed.) 1904. *Judith, an Old English epic fragment.* The Belles-Lettres series. Section Ⅰ. (repr.) 1972. N.Y.: AMS Press.

Dobbie, E.V.K.(ed.) 1953. *Beowulf and Judith. The Anglo-Saxon Poetic Records*(IV). N.Y.: Columbia Univ. Press.

Whitelock, D.(revised) 1967. *Sweet's Anglo-Saxon Reader.*(15th Ed.) Oxford: Clarendon Press.

Wyatt, A.J.(ed.) 1919. *An Anglo-Saxon Reader.*(repr.) 1965. Cambridge.

鈴木重威編『宗教詩』1972. 東京　研究社

References

a) Dictionaries

Bosworth, J. and T.N.Toller(eds.) 1898. *An Anglo-Saxon Dictionary.*(repr.) 1976. Oxford Univ. Press.

_____. 1921. *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement.*(repr.) 1973. Oxford Univ. Press.

Borden Jr., A.R. 1982. *A Comprehensive Old-English Dictionary.* Univ. Press of America.

Jember, G.K.(ed.) 1975. *English-Old English, Old English-English Dictionary.* Colorado: Westview Press.

Grein, L.W.M. 1861 - 4. *Sprachschatz der Angelsächsischen Dichter.*(revised by J.Köhler, with help of F.Holthausen) 1912.(repr.) 1974. Heidelberg: Carl Winter.

Hall, J.R.C. 1894. *A concise Anglo-Saxon Dictionary.*(4th Ed.) 1960. London: Cambridge Univ. Press.

Holthausen, F. 1934. *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch.*(Dritte, unveränderte Aufl.) 1974. Heidelberg: Carl Winter.

Sweet, H. 1896. *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon.*(repr.) 1976. Oxford: Clarendon Press.

b) Translations

Bradley, S.A.J. 1982. *Anglo-Saxon Poetry.* Everyman's Library. London: Dent.

Gordon, R.K. 1926. *Anglo-Saxon Poetry.*(repr.) 1976. Everyman's Library. N.Y.: Dutton.

鈴木重威・鈴木もと子共訳『古代英詩』1978. グロリア出版

羽染竹一訳『古代英詩選』1963. 原書房

c) Studies

Chase, Colin.(ed.) 1981. *The Dating of "Beowulf".* Univ. of Toronto Press.

Kiernan, K.S. 1981. Beowulf *and the* Beowulf *Manuscript.* New Jersey: Rutgers Univ. Press.

厨川文夫「ベーオウルフ」1962.『英米文学史講座 1　中世』, 17 - 34.

佐藤修二(書評) "Kevin S.Kiernan: Beowulf *and the* Beowulf *Manuscript.*"『英文学研究』(第六十一巻第一号), 167 - 170.

藤原　博(書評) "Colin Chase(ed.): The Dating of *Beowulf.*"『英文学研究』(第六十巻第一号), 189 - 192.